

巻頭言

柱がなくなると家が傾く

沼野 充義

私は尋ねました——「何が重要なのですか、先生」と。
彼は答えたのです——「まあ、そうだな。モノとアイ
デアだ」と。

(テリー・イーグルトン『批評とは何か』大橋洋一訳)

現代文芸論研究室は2007年（平成19年）に創設され、満12周年を迎えることになる。年一回のペースを目標に刊行してきた研究室論集『れにくさ』も、途中刊行できない年が何度かあったが、ほぼ順調に研究室関係者、特に若手研究者・大学院生の活発な成果発表・意見交換の場として機能してきた。本誌にこれまで掲載されてきた論文などの蓄積はすでに相当なものになり、通覧すると私たちの研究室が切り開いてきた現代的な文学・文化研究の方向性がはっきり見えてくる。

今回の『れにくさ』は、2007年の創設以来、現代文芸論研究室の運営および教育に一貫して積極的に関わってこられた大橋洋一教授の定年退職を記念して、特別号とさせていただくことになった。『れにくさ』では、すでに野谷文昭教授を送る号（第4号）、柴田元幸教授を送る号（第5号）があり、今回はそれに次ぐ3回目の記念号となる。これは現代文芸論研究室の歴史そのものになっていると言えるだろう。ただし、大橋教授の場合はここに特に記して、研究室一同より感謝の言葉を捧げるべき特別な事情がある。

というのも、大橋さんは——と、ここから敬愛の気持ちをこめて、他人行儀の「教授」はひとまず措く——制度上、英語英米文学研究室が本務であり、現代文芸論の仕事には事実上兼務の形で関わっていただいていたからである。しかしそれは決して片手間の仕事ではなく、大橋さんには授業、学生指導、その他の研究室運営の学務のすべてにわたり全面的にコミットしていただいていた。現代文芸論研究室は創設時から、欧米の一国一言語に限定されない視点からの文学研究全般（越境的な文学、世界文学論など）の他、翻訳研究と批評理論を柱として掲げてきたのだが、大橋さんにはまさにその柱の一つ、批評理論を担当していただいた。つまり、改めて言うのも気がきかない話だが、「兼務」とはいっても、あちらからこちらにちょっと手伝いに来ていただいた、などという次元のことではなく、大橋さんは、それがないと家が傾きかねない柱だったのである。二つの研究室に同時に関わり続けるということが、物理的にも精神的にも並外れたエネルギーを必要とすることは言うまでもない。ついでながら、それで給料が増えるわけでもないが、越境的な教育への関わりを通じて、多彩な教え子たちと出会い、教師自身にとっても豊かな経験という「見返り」は多少はあったのではないだろうか（どうでしょう、大橋さん？）

これは文学部という場所全体の問題なのだが、ここには英米文学、仏文学、国文学といった個別の国別あるいは言語別のディシプリンはあっても、そういったディシプリンを超えて批評理論そのものを扱う場がなかった。しかし批評理論は本来、もとの分野を超えて様々な影響を与える越境的な知の装置であり、伝統的な一研究室の枠に閉じ込めることはできない。大橋教授は現代文芸論という新しくできた開かれた場において、まさにこのような越境する批評理論を実践されてきた。実際、大橋教授が現代文芸論で開講したこれまでの授業や演習には、現代文芸論以外にも、じつに様々な専攻の院生・学生たちが参加し、批評理論の薫陶を受けて来た。学部生向けの文芸批評理論の講義は文学部としては異例の多くの受講者をいつも集めていたが、それはこの授業が現代文芸論にとってだけでなく、文学部全体にとって必要なものであったことを示している。残念なのは、唯野教授よりもずっと面白いと噂されている大橋さんの授業を、私自身が一度も聴講する機会に恵まれなかったことだ。

こんな短い巻頭言では言い尽くせないほど大きなこれまでの貢献に深く感謝して、また研究室の主要な柱を（当面誰もその代りを務めることができない）失うことを悲しみながら、『れにくさ』の記念号を大橋洋一教授に捧げる。

付記

この巻頭言を書いてしまったから、校正刷を見たある人から「現代文芸論研究室がこの先傾いてしまうなんてことを書いたら、研究室を担う次世代の教員の皆さんに失礼じゃないの」と言われた。確かにそうである。しかし、一度書いたものはそう簡単に取り消せないのも、柱というのは大橋先生が我々の研究室にとっていかに重要な存在であったかを言うための言葉の綾であり（もちろん嘘とかお世辞といったことではない）、次世代には次世代の立派な柱がすでに何本も立っているので、もっと立派な家になっていくに違いないと信じていることもここに付記しておく。